２０２３年2月２６日　Ｎｏ.３６５６　週報上掲載

先週の講壇から　　〝自分地獄からの解放〟

マルコによる福音書　8章31節～38節

聖句「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(8:34)

１．《自分のために》　「自分を捨てろ」等と言われると、まるで俗世を捨てて出家して、自分の意志や感情まで否定することのように思われます。実際、中世の修道院では「苦行」を意味していました。鞭打ちや断食、徹夜の跪拝です。宗教改革者ルターも当初は、修道士として自分を捨てようと努力していましたが、何をしても「自分」という存在が腰を下ろしていることに気付きます。教会に仕える、神と他者に仕えると言いながら、自分のことばかり拘っていたのです。

２．《持て余す自分》　教会はさて置き、広い世間に目を転じますと、現代は「自我の解放」が叫ばれ「自分らしさ」が強調されています。悪い事ではありませんが、自由な生き方を求めつつも、否、求めれば求める程に、自分が何をしたら良いのか分からず、不自由に成っているようにも思われます。昨年の発表によると、日本全国に「ニート」の状態に置かれた人たちが（15～39歳までに限っても）75万人もいるとの由。ハイデッガーは、現代人は「自分自身に飽き飽きして、自分が重荷になっているような気分」に陥っていると言います。「体のダイエット」が言われますが、「心のダイエット」が必要なのではないでしょうか。

３．《他者への責任》　「自分を捨てる」ことに専心しても解放されません。「より自分らしい自由な何か」を求め続けても自己閉塞に陥るばかりです。「自分を捨てる」ことは「自分の十字架を背負う」ことです。他者（神や人）のために自分の心を献げて行くのです。レヴィナスは「人は他者に対して責任を負う時にだけ個人になる」と言います。誰かに対して「責任を負う」こと、私たちはそれを「愛」と呼んでいます。各々に「背負うべき十字架」が託されています。それを背負って初めて、私たちは一人の人間に成ることが出来るのです。キリストに従い、愛という十字架を背負う人は「自分地獄」から解放されるのです。

朝日研一朗牧師